

詩人アクバル・イラーハーバーディーとその詩

片岡弘次

1857年のインド大反乱は、イギリスによる植民地化の影響を受けていた、インド人の積年の不満の爆発であったが、この大反乱の挫折は、ムガル朝の終りと、インド・ムスリムの衰退を決定的にするものであった。そしてインド・ムスリムはその攘夷的な姿勢の転換を余儀なくされたが、その中で新しい時代への転換を自覚的に唱えたのが、サル・サイヤド・アフマッド・カーン(1817~98)であった。サル・サイヤドは、大反乱以降、積極的にイギリス植民地行政に結びつき、植民地官僚に進出することを人々に訴え、そのためには、ムスリムが近代的教育を受ける必要があると説いた。これは大反乱の敗北以後、虚脱状態にあったムスリム上流階級の間に大反響を呼び起し、それがアリーガル運動として発展した。

アリーガル運動の基本的立場は親英策であったが、その親英の意味は、被支配者のムスリムが、イギリスに盲従するのではなく、ムスリムの上流階級あるいは新中間階級がイギリスの近代的市民倫理を身に着け、その上で植民地支配者に対し自分達の正当な権利を尊重させることであった。そのために近代的教育機関の設立とそこでの教育の必要が起り、偏狭さを排し、理性至上主義の提唱が必要になった。この運動の中で、ウルドゥー文学も、社会的意味や改革の意味を殆ど持たなかった従来から、目的意識や功利的な意味を持つ文学に変わり、アリーガル運動推進の一翼を荷うことになった。ハーリー(1837~1914)、M・H・アーザード(1832~1910)、シブリー(1857~1914)、アクバル(1846~1921)等は当時を代表する詩人や作家で、それぞれ多少の違いはあるにしても、前三者は運動推進派として、アクバルは批判的な立場を取りながら、19世紀末、ウルドゥー文学を近代文学へ転換させて行く原動力となった。

アクバルは1846年アラーハーバードのバーラーで生まれた。祖父はウラマー、父親も信仰に厚く、父親からペルシャ語やアラビア語を学び、そして後に、アクバルがアリーガル運動に批判的立場を取る要因の一つとなった神秘主義の影響も受けて育った。初等教育はアラーハーバードのミッション・スクールで受けたが、アラーハーバードがインド大反乱の中心的舞台の一つとなると、1859年、学校が閉鎖され、僅か3年で学校を止めねばならなかった。学校を止めると初め、

東インド会社の建設局で働いたが、それはアクバルに向かず、文学や詩の会が開かれるとそれに出席し、法律や英語の勉強も始めた。その後、裁判所に勤め、判決文のすべてが英語で書ける位、英語の運用力は増した。青年時代は自由奔放な生活を送るが、21歳の時、下級判事の試験に合格、23歳の時、副徴税官となり、27歳の時には、上級判事の試験に合格、ハイコートで判事となり、35歳で裁判官となった。アクバルのこの順調な昇進は、インド大反乱以降、ムスリムが職を得るのが難かしくなった中で、異例のことであった。即ち1857年の大反乱の処理に対し、イギリス統治者の態度は、ヒンドゥーやシックに較べムスリムには重い刑罰を科し、一般のムスリムは職に就けず、ムスリムを孤立させる分割策が取られていたからであった。

サル・サイヤドが1870年、イギリスから帰国したのは、ムスリムがこの様な苦境に陥っていた最中であった。サル・サイヤドはこの苦境打破のために、イギリスとムスリムとの間にある見解の相違や誤解を解こうと、西欧の学術や文明を取り入れ、人々の間の意識の変革を求める改革を始めた。しかしこのサル・サイヤドの運動に対して、やがてアジアの精神と気質に反すると考える者が現われ、またイスラームに対し、懷疑と無関心さを起させたので、ウラマーはサル・サイヤドのこの啓蒙運動を宗教に対する危険なものと考えた。一方アジアの文化や慣習に愛着を抱く者は、その伝統が失なわれたり、文化的背景が破壊されて行くのに耐えられなかった。アクバルはその後者であった。

アクバルが本格的に詩作活動を始めるのは30代の後半からであった。アクバルは諷刺詩人と言われるが、その詩には次の三つの外面的影響、即ちラクナウ詩派からの影響、『アワド・パンチ』誌の影響、アリーガル運動からの影響があった。

アクバルの詩の特徴である諷刺やウイットは、ラクナウ詩派と『アワド・パンチ』誌からの影響が大きかった。アクバルは詩を初め、アーティシ (1785年前後～1846) の弟子、ワーヒドから習い、ラクナウ詩派の濃いガザルを書いた。ラクナウ詩派のガザルにはウイットのためのウイットが多くあった。更にアクバルの諷刺に手本を示したのは、1877年、アクバルが28歳の時ラクナウから出され、1912年まで続いたユーモアを主体にした『アワド・パンチ』誌であった。それは近代化の風潮に反対し、アリーガル運動に批判的な雑誌で、アクバルは役人という立場上、憶病な程、政治と正面から相対することは避け、『アワド・パンチ』式の書き方を取った。しかしアクバルの諷刺は程なく、その軽率で浮薄なものか

ら、道徳的強靱さを持った諷刺へと変った。そしてこのアクバルの詩の諷刺やウィットの素材を与えたのは、アリーガル運動で、それ故サル・サイヤドなしには、アクバルの存在もなかったと言わなければならない。特に、1884年から4年間に渡るアクバルのアリーガル滞在は、サル・サイヤドの運動を間近で見させ、アクバルに諷刺の鋭い矢を尖らす機会を与えた。それは、アクバルがサル・サイヤドの使命の偉大さを認識できなかった訳ではなく、そこには、社会的、政治的リーダーとしてのサル・サイヤドの偉大さへの個人的羨望の気持も働いていた¹⁾。

アクバルの諷刺には、これら外面的影響の他に、アクバルの中にあった神秘主義的、モラリスト的、懐古主義的、禁欲主義的要素がある。これらの要素が、時に単独で、時に幾つかが結合して現われる。

その神秘主義的要素は、年と共に、アクバルの精神的生活を覆いながら成長し、アクバルの批評精神の根幹となった。即ち、新しいものを取り入れるのに忙し過ぎるその運動は、人間生活の究極の目標である神との精神的結合を不可能にするように見えた。またその運動に対するアクバルの不信は、人々の道徳的急変からでもあった。物質的目標を掲げてするそれは、退廃的なものにししか見えず、アクバルにとり進歩とは、内的完成であり、知識の習得ではなかった。理性を優先させ、すべてを理性で判断しようとした当時の改良主義者に対し、アクバルは直感を重んじた。それ故、無駄なものを取り除こうとする改良主義者は、アクバルには、イスラームへの攻撃としか見えなかった。アクバルにとり、過去は神聖で批判することの出来ないもので、そしてその敬愛の対象は、宗教だけに限らず、文学、着物、教育などムスリムの過去のあらゆるものを含んでいた。

しかしこの過去への強い執着は、アクバルの弱い所でもあった。アクバルは社会の愚行や腐敗に対する深い洞察力があり、大胆に物質文明を批判したが、新しい社会や文化に対する極端な禁欲的な態度は、新しいものから起ってくる美や理想に対して、自からを盲目の人にしてしまう危険があった。更にそれに生来の陰鬱な性格と独断的性格が加わると、その傾向は一層強くなる。

アクバルの詩は19世紀の70年代から20世紀の20年代まで、およそ半世紀に及ぶインド・ムスリムの政治、社会の写しであったが、その一番のテーマは、アリーガル運動に際し、急激に流入して来た西洋文化の影響より生じた文化と社会の変化に関してであった。即ち、西洋かぶれした者が英語を得意がって話し、自己の言葉を軽蔑したり、新教育の影響で女性がパルダウを取ったり、ケイキやビスケットを食べ始めたり、舶来の香水を匂わせたり、或いはシガレットの煙りの中に、

フッカーの煙りが消え入ってしまうことは、アクバルには耐えられなかった。アクバルにとり民族文化や社会の基礎はイスラームの宗教や道徳であったので、物質崇拜に基づく西洋文化が民族全体を覆ってしまうのではないかと懸念したからであった。特に新教育は、宗教の持つ重要な意義を強調する代りに、宗教と自然、精神性と物質性のあいだの調和の努力を不明確にしていた点が、納得いかなかった²⁾。

更に、植民地主義に対することもアクバルの重要なテーマであった。西洋文化や社会の影響は、政治的支配の後に起って来る精神的支配と関係があると考えたからであった。この点、アクバルはイギリス帝国主義に反して聖戦の旗を掲げた最初のウルドゥー詩人と言える³⁾。

インド大反乱の終結はイギリスが植民地体制を完成し終った時であったが、それはインド・ムスリムの新教育で身を飾ったプロフェッサーが、植民地支配から自らを解放させる努力を始めた時でもあった。そしてアクバルは大砲の代りに諷刺の武器を取上げ、民族の苦痛や苦悩を心に秘め、新しい文化戦争を戦い始めた。その詩には、新時代の新しい階層の人々や、片仮名混りの英語の語句まで含まれ、新時代の人々への警告や覚醒となった。しかしこの様な諷刺も、1921年に亡くなるまでの晩年の10年間は、アクバル自身の目の病気や、妻や子供の死で影を潜め、代りに神秘主義的傾向が増した。アクバルを、当時の社会的要求や認識を欠いた復古主義者と非難する人もいるが、その詩はムスリム解放運動の道案内となり、ムスリム復興を期したイクバル等に影響を与えることになった。

1) “A HISTORY of URDU LITERATURE” Oxford University Press, 1964, p. 305.

2) 『近代ウルドゥ文学史研究』東海大学出版会、昭和54年、p. 67.

3) “Urdū shā'irī ka siyāsī aur samāji pas manzar” Oriental College Lahore, 1966, p. 382.